なこと割面ですが、耳賀の海岸に神崎六平氏の彰徳碑が建っている筈。題字は藩主も利子爵、撰文はとくなられた佐藤蔵太郎翁、小生は二日かかって書きましたが、署名はしていません。昭和十二年三月に書いたものです。（以上）

（編集者附記）

一、以上は葉書に書かれた全文で、古文書と思いたのでその、お礼に、佐伯郷土史年表をご覧上げたところ折返しこのはがき使りで、全文悉く史実から昭和に入りての佐伯の歴史にふれているので、特にそうて全文原文のまゝ掲げさせて戴いました。

二、古文書は嘉永二年、蒲岸見廻りの方から、五浦の牛馬についてのことで、古市村源太を馬問屋に命じ、村々の取締世話役二十名を仰付け、牛馬売買等についての規定を申し渡した覚書で、藩政時代の五浦農民に対する畜産取締の政策を打ち出している。いずれ完全に近く読解の上、全文を資料として紙上に紹介しよう。

三、耳賀八幡神崎六平氏の彰徳碑のことは既に編集者も見聞していたもので当然、五月下旬の現地研修に会員の研究対象になるもの。一つの課題が与えられたことになる。

四、料生氏は旧姓土橋、旧姓佐伯中学（お母さま）本葉校、小学校代用教員として、東雲（ここで編集者と一しょに勤めた）耳賀等で教鞭をとり精勤よく児童カードで文検習字の検定をかちとり、中学教育に当り富島高校を最後に退職、目下美々津町にお住居である。郷土研究会の面で賛助協力下さっているので、本会賛助会員として歓迎している。

（三十二頁 下段より つづく）

灘は江戸時代の藩政の頃より、防衛方面への船の立寄り場所で栄り、また見張りとする国防上重要な地点であった。そして明治時代になると位置を利用して、林産物輸送の中継地となった。昔から灘に住む人々も、どこの部落や浦にもあるように、近隣の木立や堅田、吹、松浦等の地縁的、血縁的つながりを持って暮してきたごく自然の所のようである。

（つづく）

研究

佐伯の港はどんな動きをしているか

——主として木材の流通について——

佐伯豊南高等学校教諭
同校郷土誌クラブ顧問
本会会員　市野瀬　仁

第一章　港の変遷（つづき）

第二節　番匠川

（四）灘（なだ）

堅田川と番匠川が合流した水が海に出る右岸に、大江灘の部落がつづいている。戸数約百十戸からなる大船渠なる屋敷部落のことを東灘と呼んで、西岸と合せて灘といっている。

ここにも港があった。いやここにこそ港があったという方が適切かも知れない。

まず始めに灘を、歴史上から眺めてみよう。

歴史上から見た灘

明治をさかのぼると橋のないことは常識である。鶴見浦と米水津、木立の二方面に分れる道路の要にあたる茶屋が最橋もその例にもれず、木造の橋が初めて架ったのは、昭和五、六年頃であった。時の野村一也町長が祝辞に明治何年とか読んだので野次がとんだという話がある。

裸の船頭でその名を知られた万おいさんが、木立から佐伯の町に人々を乗せて船を漕いだ頃は、まだ昭和になっ

ていなかったようだ。

茶屋が鼻

茶屋が鼻には枝ぶりのよい松が川岸に生え、木陰にお地蔵さんが立っていた。この辺一帯は景色がよく、毛利公の涼み場所もあったところから、茶屋が鼻とつけられたのであろう。

鳥越部落

橋と渡って左に折れた最初の鳥越部落は、「お寄半蔵」に縁のあるところである。

親の心やすめるために　どうぞお寄と刷れてたもりや
そなた一生添わせる妻と　かねて見立てて定めたものは
灘の鳥越　お繁と言うて　ここし十月ア引越す筈よ
あれと仲好う夫婦となって　家の栄えを図ってたもりや
……
いやなお繁と　夫婦になって　いやな生涯送ろうよりも

（堅田猫・口説より）

山根にある少しばかりの水田は、昔は波打際であったであろう。七十才台の人々の子供の頃は、真中位に兎道程のものが通り、樵の生えた岸辺に昭和十四頃県道をつくって、今のようにしたというからまだ新しい。

長バエ

長バエ部落は、西田猪之吉氏（西田病院長父）の運送問屋があった地域で、今も西田邸が昔の隆盛の跡を残している。

大船繋（おおふなつなぎ）（おおふなかかりともいう）

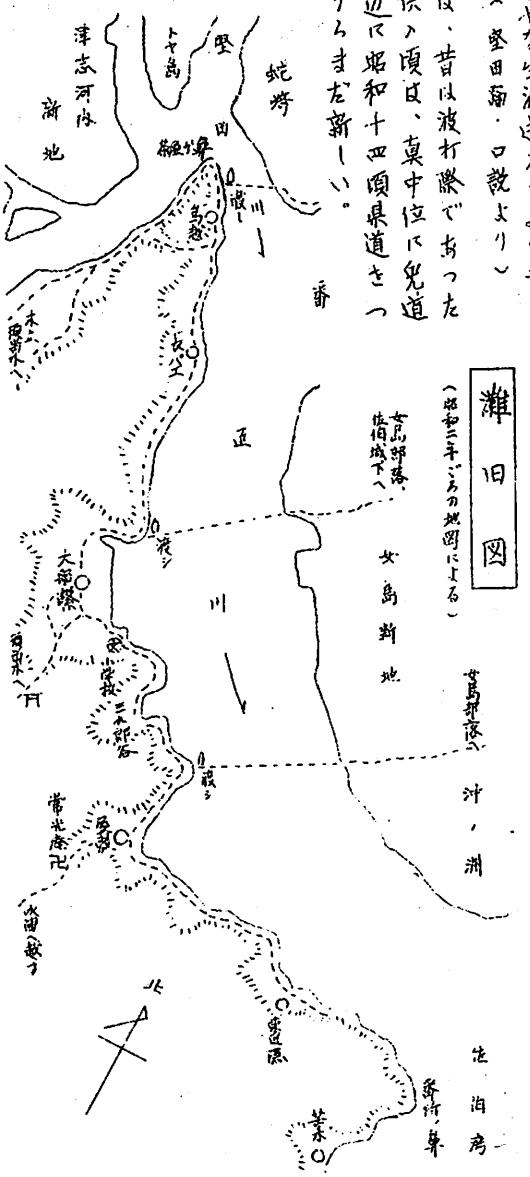
大船繋の入江に出来た広い水面は杉田新田と呼ばれ、江戸時代に開拓されたものか、たしかなことは分らない。

灘山の尾根に寺屋敷があり、材の人の話によると土器も出たということであるが、調査していないので確かなことはいえない。

旧小学校の近くに吉川氏の邸宅がある。庭端の山手にそった叢の中に、安政・嘉永・弘化等の墓碑があり、その中に将棋盤の形の台に駒をかたどった塔婆を立てた一風変った墓がある。灘の人々が語るマンカ将軍の墓である。彼はいわば奇人で毛利公と大の仲好しで、いろいろおもしろい奇行エピソードを残した人であった。姓を波辺といい、子孫は今広島に居るらしいと金田丈長さんは語っておられた。

たしか佐伯秘説録の中に

「高謙公の御代、慶応四辰年五月、大江灘の内、三



九部谷へ御召船十二反(ママ)(長さ)御船入れ場と新規に御築造なされ、石工落雷浦惣右衛門にて、御船奉行島瀬丁右衛門・中津留治左衛門勘役申付る。御船頭始め御水主共、当番は別に申し付られず、他の御舟は皆和田ノ坂下の御船蔵に繋がれ候」

と云る。三九部谷はV字型の狭い谷間の地形で、風よけ、波よけの船泊りの場所となっている。今久栄工業が鉄材とクレーンやベルトコンベア等に製作している地点は、東九州随一といわれた金内造船所のあった場所で、この地は埋立てて出来たものである。さきのマンカ将軍や御舟入の記録や、明治の頃小学校があったことから、歴史がかこす難の中心は大体この附近ではなかったかと見られる。難の山を南台山といい、小学校を南台小学校(今分校)と呼んだところから、城山(毛利公)を中心に命名した歴史的な呼び名である。そしてこの三九部谷を境として、屋敷部落、つまり東難となるのである。

屋敷部落

U字型を描く部落の小高い中央の位置に庵があり、八十戸程ある部落の前方に橋を架けたような道路がU字型の口を塞いでいる。ここからは対岸の女島に用を足す小舟を見ることができる。

東風隠(こちがくれ)・番所の鼻

屋敷の鼻を曲がると東風隠(こちがくれ)部落となり、極割を過ると番所の鼻の峠にさしかかる。山肌の見える部分と道路下の窪地は、航空隊敷地埋立に削りとった跡で、ここから広い川に橋を架け土や石を運んだという。

毛利公が参勤交代の往復に、城に合図をしたり、日常の警戒につとめた役人の居た番所は、海岸に突出した狭い土地ながら、二十坪の位置を占めている。ここに立つと、八島・竹ガ島・片白島・三栗島・マナイタバシ・ノウジ・ハクリ島等が、絵に描いたよう蒼配翌に浮かんでいる。とくに八島には、葛の方向に鶴が羽根をひろげて舞っている姿の、千両松と呼ばれた木は、明治カ末頃大暴風雨の為めに倒れたと古老は語った。江戸時代の役人の目にも、さぞや美しく映ったことであろう。

苦木(にがき)の湾

番所の鼻を曲がると樹々に囲まれた小さな湾に、昔から大船が波よけに錨をおろした場所がある。ここが苦木である。佐藤蔵太郎著「佐伯藩発達史」には、

藩侯の江戸参勤上　御上り場より御川御座(ママ)に搭して大江難に至り城市沿岸より約一里餘隔たる苦木に碇泊せる御召船に移乗し、以て回許佐伯を出発せられしを例とせられたり。一般佐伯人の上阪する時は、皆海岸を一里餘距てたる大入島石間浦迄にて艀に乗込みたるなり。

と云る。またさきの柏江港の所で述べたように、「年貢米を佐伯九十九浦より集つた小舟が、苦木沖に碇泊した大船に競争で積込んだ」その続きに

慶応三年春頃青木猛比古先生突然帰省し・・・(中略)
同年十一月頃志士は討手が向い(中略)　皆龍王山越きして二ガキに出て、出帆間際の福寿丸に乗込み上阪いたしたり。云々

と、足田泉先生所蔵の書翰にある。

以上、上難の茶屋が鼻から東難の二ガキの鼻までの、昔からの言い伝えや歴史的な記録をたどってみたが、

(以下、八三十頁上欄の続りに)